

停車場にて

明治二十六年六月七日

昨日福岡から電報で、そこで捕へられた重罪犯人が、今日裁判のために正午着の汽車で熊本に送られる事を知らせて来た。一人の警官がその罪人護送のために福岡へ出張してゐた。

四年前一人の強盗が夜相撲町の或家に押入つて、家人をおどかして縛つて、澤山の貴重品を奪ひ去つた。警官のために巧みに追跡されてその盗賊は二十四時間内に贓品を賣捌く間もないうちに捕へられた。しかし警察署へ送られる途中鎖を切つて、捕縛者の劔を奪つて、その人を殺して逃げた。先週までそれ以上その盗賊の事は何も分らなかつた。

それから熊本の探偵がたまたま福岡監獄を見に行つて、その囚徒のうちに彼の頭腦に四ヶ年間寫眞を焼きつけたやうになつてゐた顔を見た。看守に向つて『あれは誰です』と尋ねた『ここでは草部と記入されて居る窃盗犯です』と答があつた。探偵は囚人に近づいて云つた、――

『お前の名は草部ぢやない。野村貞一、お前は殺人犯の件で熊本へ御用だ』その重罪犯人は悉く白狀した。

私は停車場への到着を目撃するために大勢の人々と一緒に行つた。私は憤怒を聞き又見る覺悟をしてゐた。私は暴力の行はるべき事をさへ恐れてゐた。殺された警官は大層人望があつた、その親戚は必ずその見物のうちに居るだらう、それから熊本の群集は甚だ穩かとは云へない。私は又澤山の警官が警戒に當つて居る事と思つた。私の豫想はまちがつてゐた。

汽車は忙しさと騒しさのいつもの光景、下駄をはいて居る乗客の急ぎ足とカラコロ鳴る音、日本の新聞と熊本のラムネを賣らうとする子供の呼び聲のうちに止まつた。

埜の外に私共は五分間程待つてゐた。その時警部によつて改札口から押されて罪人が出て來た、頭をうなだれてうしろ手に繩でしばられた大きな粗野な様子の男であつた。罪人と警官と兩方共改札口の前にとまつた、そして人々は前に押し出て、しかし黙つて、見ようとした。その時警官は大聲で呼んだ、——

『杉原さん、杉原おきび、來てゐますか』

背中に子供を負うて私のそばに立つてゐたほつそりした小さい女が『はい』と答へて人込みの中を押しわけて進んだ。これが殺された人の寡婦であつた、負うてゐた子供はその人の息子であつた。役人の手の合圖で群集は引き下つて囚人とその護衛との周圍に場所をあけた。その場所に子供をつれた女が殺人犯人と面して立つた。その靜かさは死の靜かさであつた。

少しもその女にはなく、ただ子供だけに向つてその役人は話した。低い聲であつたが、大層はつきりしてゐたので、私は一言一句きく事ができた、——

『坊つちやん、これが四年前にお父さんを殺した男です。あなたは未だ生れてゐなかつた。あなたは母さんのおなかにゐました。今あなたを可愛がつてくれるお父さんがないのはこの人の仕事です。御覽なさい、(ここで役人は罪人の頸に手をやつて嚴かに彼の眼を上げさせた)よく御覽なさい、坊つちやん。恐ろしがるには及ばない。厭でせうがあなたのとつとめです。よく御覽なさい』

母親の肩越しに男の子はすつかりあけた眼で恐れるやうに見つめた、それからすすり泣きを始めた、それから涙が出た、しかし畏縮しようとする顔をしつかり、そして従順に、續いて眞直にじつと見て、見て、見ぬいた。

群集の息は止つたやうであつた。

私は罪人の顔の歪むのを見た、私はその鎖も構はないで突然倒れて跪いて、そしてその間聞いて居る人の心を震はせるやうに悔恨の情極つたしやがれ聲で叫びながら、砂に顔を打ちつけるのを見た、——

『ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんして下さい、坊つちやん。そんな事したのは怨みがあつたのでありません、逃げたさの餘り恐ろしくて氣が狂つたのです。大變悪うございました、何とも申しわけもない悪い事を致しました。しかし私の罪のために私は死にます。死にたいです、喜んで死にます、だから坊つちやん、憐れんで下さい、堪忍して下さい』

子供はやはり黙つて泣いた。役人は震へて居る罪人を引き起した、沈黙の群集はそれを通すた

めに左右へ分れた。それから全く突然全體の群集はすすり泣きを始めた。そしてその日にやけた警官が通つたとき、私は前に一度も見た事のない物、めつたに人の見ない物、恐らく再び見る事のない物、即ち日本の警官の涙を見た。

群集は退散した、そしてこの光景の不思議な教訓を默想しながら私は残つた。ここには罪惡の最も簡單なる結果を悲痛に示す事によつて罪惡を知らしめた容赦をしないが同情のある正義があつた。ここには死の前に只容赦を希ふ絶望の悔恨があつた。又ここには凡てを理解し、凡てに感じ、悔悟と慚愧に満足し、そしてままならぬ浮世と定め難き人心をただ深く經驗せるが故に憤怒でなく、ただ罪に對する大なる悲哀を以てみたされた群集（怒つた時には恐らく帝國に於て最も危険な群集）があつた。

しかしこの一挿話のうち、最も東洋的であるから、最も著しい事實は、罪人の親たる感じ、どの日本人の魂にも一大分子となつて居る子供に對する潜在的愛情に訴へて悔恨を促した事であつた。

日本の盜賊のうちで最も名高い石川五衛門が或夜人の家に入つて殺して盜まうとした時、自分に手をさしのべた子供の笑顔に氣を取られて、その子供と遊んでゐて、遂に自分の目的を果す機

會が全く失はれたと云ふ話がある。

この話を信ずる事はむづかしくはない。毎年職業的犯罪者が小兒に對して憐みを示した事が警官の記録にない事はない。數ヶ月前地方の新聞に恐るべき殺人事件（盜賊が一家をみなごろしにした事件）が記されてあつた。眠つて居る間に七人の人が文字通り寸斷されたが、警官は一人の小さい子供が全く害をうけずに血の溜りに獨りで泣いて居るのを發見した。警官は加害者がその小兒を害しないやうにと餘程注意したに相違ない事の疑のない證據を見出した。

（田部隆次譯）

At a Railway Station. (Kokoro.)